ご寄稿

五一の手習い

部長　西川　伸一

井田先生の在外研究中、部長の責めをふさいでおります。わずか二年間ではありますが、よろしくお願いいたします。

さて、外務担当の部員の方から毎月の練習予定や試合結果、さらには昇段昇級審査会の模様などを、こまめにメールで報告いただいている。出不精の部長としては、部の様子がよくわかって大変助かっている。特に注目してしまうのが審査会の合否である。全員が所期の昇段昇級を果たしていると、こちらまでうれしくなる。

何度かメールを受け取っているうちに、私もこのような上達の達成感を味わいたいと思うようになった。とはいえ、合気道などスポーツをはじめる気にはなれなかった。着替えるのを考えるだけでおっくうだ。通うのに便利で時間があまり取られなくて、しかも手軽にできる習い事はないものか。

こうした「不純な」動機を抱えて街を歩いていると、それまで何気なく見過ごしていた看板に注意が向くようになる。昨年のまだ暑い秋のこと。私の研究室がある駿河台研究棟の目と鼻の先に、楽器を教えてくれるスクールがあったことに今さらながら気づいた。しかも、神保町駅から研究棟までの私の通勤経路にある。

思い立ったが吉日という。さっそくそのスクールでギターを習うことにした。実は、はるか昔の高校一年生のとき、母親が入学祝いにフォークギターを買ってくれた。教則本に沿って我流でコードを覚えてみたが、半年も続かなかった。ギターは音楽好きの友だちにあげてしまった。そのときの記憶がずっと心の小さな負債になっていた。それを返済する意味もあった。ただし、今回は挫折したフォークギターではなく、クラシックギターを選んだ。

週に一度、四〇分ほどのレッスンである。家では寝る前の三〇分間は、どんなに忙しくても練習時間に充てている。押さえられなかったコードが押さえられるようになる、あこがれていたメロディーがどうにかこうにか弾けるようになる。ささやかな達成感に日々出会えることは、もう五一歳でいやがうえにも老境へ向かっていく私の人生を豊かにしてくれそうだ。

昨年最後のレッスンが終わったとき、私は講師の先生に「大げさですが人生が変わった気がします」と年末の気分を「告白」した。先生いわく「楽しくやらないとね。」確かにこれが長続きの秘訣だろう。まなじり決して取り組んでは、息が切れてしまう。

いまは初心者コースである。時間をかけて初級者、中級者、そして上級者と「昇段昇級」していきたい。七〇歳時の自分に会うのがちょっと楽しみなのだ。